

◆ 仁科記念賞 4 人が受賞

仁科記念財団（小林誠理事長）は9日、物理学の分野で優れた業績をあげた研究者を表彰する仁科記念賞の今年度の受賞者4人を発表した。有馬孝尚・東京大教授（58）と木村剛・東京大教授（53）は、磁石の力で電気的な性質が変わるなどの性質をもつ「マルチフェロイックス」と呼ばれる新素材を多数発見した。滝田正人・東京大教授（61）は、宇宙から来た高エネルギーのガンマ線を観測し、発生源が銀河系内にあることを実証した。宮崎聡・国立天文台教授（56）は、米ハワイ島のすばる望遠鏡に設置する超広視野のカメラを開発し、銀河分布の3次元地図データベースを作成した。

読賣新聞2021年11月10日朝刊 1 3 版

東京新聞 2021年11月10日朝刊 12 版

★ 仁科賞に宮崎教授ら4氏

物理学で優れた業績をあげた研究者に贈られる仁科記念賞の本年度の受賞者が、国立天文台の宮崎聡教授（五十六）と、いずれも東京大の有馬孝尚教授（五十八）、木村剛教授（五十三）、滝田正人教授（六十一）の四氏に決まった。仁科記念財団（小林誠理事長）が九日、発表した。

宮崎氏は、超高性能デジタルカメラをハワイのすばる望遠鏡に付けて高い精度で多数の銀河を調べ、宇宙の成り立ちの鍵とされる暗黒物質がひそんでいる場所を割り出し地図にした。

有馬氏と木村氏は、磁石の性質と電気的な性質が絡み合うマルチフェロイックス物質の仕組みを解明し、新しい材料などへ応用の道を開いた。

滝田氏は、中国チベットの高地に設けた装置で宇宙から来る高いエネルギーのガンマ線を観測。六十年来の謎だった超高エネルギーの宇宙線（宇宙を飛び交う粒子）の発生源が、銀河系内にあることを示した。

授賞式は十二月六日にオンラインで開かれる。賞金は業績一件につき六十万円が贈られる。